

平成30年5月6日  
横浜歴史研究会 丸山雅子

## 『吾妻鏡』に見る梶原景時追放の真相

はじめに

私がなぜ讒言者といわれる梶原平三景時に興味があるかというと、私の故郷、犬山市の羽黒地区は、梶原氏との関係が深いためである。

正治2年(1200)、梶原一族は鎌倉を追放され、静岡県、清水で討ち死にした。景時の次男、景高の遺児である豊丸(景親)は、乳母と7人の家臣に守られて、羽黒に落ち延びたといわれている。その後、現在の興禅寺(梶原氏の菩提寺で、開基は景時と伝わる)のある場所で館を構え、およそ380年間、領主として羽黒を治めた。

景親から数えて17代目、景義は織田信長に3000石で仕えたが、本能寺の変で息子ともども殉死し、羽黒梶原氏は断絶した。その後、小牧長久手の戦いの前哨戦の戦場になり、羽黒一帯は焼け野原になり、梶原屋敷もなくなってしまう。しかし、羽黒には7家臣の名字の家が、多数存在する。私の実家もその1つだ。

今から30年ほど前、7家臣の子孫や、興禅寺が中心となって「かじわら会」が発足、5年ほど前、叔父が会報を送ってくれたのが縁である。

会報「かじわら」によると、豊丸は名馬「磨墨」に乗って落ち延びたと伝わる。ご存知のように「磨墨」は景時の長男、景季が頼朝から拝領した名馬で、宇治川の先陣争いをした話は有名であったので、伝承に尾鱗がついたか、代々、梶原家の黒毛馬は「磨墨」と名付けられたかも知れない。

景時は頼朝の死後、讒言の罪で66名の御家人から、弾劾状を突き付けられ、鎌倉を追放された。『吾妻鏡』には「長年にわたる積悪が遂にその身に及び、諸人の背反を招くことになった」とされる。

『吾妻鏡』は時の権力者、北条氏によって、編纂されたもので、北条氏に都合よく書かれたものであるが、鎌倉時代研究の前提になる一級史料には間違いない。これを基に、景時の鎌倉追放の真相を探ってみた。

### 1 景時の出自

景時の出生年、幼年期、青年期の史料は無いとされるが、出生は保延6年(1140)ごろと推定され、頼朝よりは7歳ほど年上とされる。系図も各系図まちまちで、不明な点が多いが、桓武平氏の流れをくみ、後三年の役で源義家のもと、武勇をもって知られた鎌倉権五郎景正(政)を祖とする、大庭、長尾、長江、などと同族の鎌倉氏であったことは、確かなようである。

梶原氏の本拠地は、鎌倉市西部の梶原で、深沢小学校の校舎裏のやぐらには、梶原氏の

供養塔があり、隣には鎌倉権五郎を祀った梶原御霊神社がある。

景時歴史登場以前を推測すると、『吾妻鏡』建久2年(1191)の記述に「藤原(徳大寺)実定が亡くなり、景時は弟、朝景とともに恩顧を受けた」とある。徳大寺家は皇后を輩出し、和歌をよくする家柄である。景時は徳大寺家に仕えた家士ではなかつたらうか。梶原一族が京風文化を身につけ、学問や和歌に造詣の深かつた理由が、そのあたりにあるような気がする。

また、羽黒興禅寺は承安4年(1174)に景時が開基したという伝承もある。羽黒は小弓荘という法勝寺の荘園であった。領家の預所となって現地に赴任したのではないか。いずれにしても、かなりの有力者であつたと思われる。

## 2 頼朝の側近としての景時

景時の歴史登場は治承4年(1180)、石橋山の合戦に敗れた頼朝を見逃したという『吾妻鏡』の記述においてである。この時、景時は大庭景親を大将とする平家側にあつた。『吾妻鏡』には「ここに梶原平三景時という者がおり、確かに頼朝の御在所を知っていたが、情に思うところがあつて、この山に人が入つた痕跡はないと偽つて、景親の手勢を引き連れ、傍らの峯に登つていった」とある。

こうして危機を脱した頼朝は安房に逃れ、勢力を盛り返して鎌倉入りをする。

景時が頼朝の命令により、初めて参上したのは翌年の治承5年(1181)1月、土肥実平に連れられ謁見した。景時は、文筆に携わる者ではないが弁舌が巧みで、頼朝はお気に召したという。弟の朝景、息子の景季、景高、景茂など一族が重用された。

景時は、甲斐源氏の武田信義が起請文を書いた時に立ち合い、小御所、鶴岡若宮造營の奉行などにもたずさわつた。有能さがかわれ、侍所の所司(次官)に任ぜられる。

侍所とは、鎌倉幕府が最初に置いた政治機関で、後に置かれた公文所(政所)、問注所とともに、幕府の3大機関の支柱である。御家人の統率、軍隊の動員、戦功の有無、規律違反から、日頃の行動の評定などを行う機関で、別当(長官)には和田義盛がなつた。

寿永2年(1183)、上総権介広常が謀叛の疑いがあるとして、頼朝の命を受けた景時に暗殺される事件がおこる。

広常は関東武士団の中でも、圧倒的な兵力を持ち、鎌倉に凱旋出来たのも広常の力が大きかつた。彼ら武士たちの望みは、所領を安全確実に保護し、彼らの争いを公正に裁決してくれる指導者であつた。そのために、貴種の血統をひく頼朝を棟梁とすることで、東国の独立をはかり、大きな政治勢力を得ようとしていた。それに対し頼朝は武家政権の権威を優先しつつも、朝廷と均衡を保つ日本統一にあつた。

そんな折、後白河法皇から鎌倉に対し、木曾義仲の討伐を要請する知らせが届く。当然のごとく広常は反対する。また日ごろから広常には頼朝に対する不遜な振る舞いも多かつた。そこで頼朝の命令を受けた景時は、双六のいさかいと見せかけ、広常を一刀のもとに切り殺した。この時、景時の果たした役割は政治的にも大きく、頼朝の景時に対する信頼はさらに高まり、頼朝もますます独裁制を強めていく。

### 3 景時の讒言

広常暗殺事件の後、頼朝は後白河法皇から要請のあった木曾義仲討伐の兵を出す。範頼と義経の2人の弟を大将として軍勢を出発させ、景時も軍監という立場で戦場にのぞむ。

義仲との戦いの勝利を知らせ持った範頼、義経、安田義定らの使者が鎌倉に到着した。それは単なる結果報告にすぎなかったが、一步遅れて着いた景時の使者は、合戦の状況などを詳しく書いた報告書を持参、頼朝は景時の配慮は全くもって神妙であると感心される。

一の谷の合戦では、景時は大手範頼の軍奉行の任にあたり、平重衡を生け捕り、播磨、美作の守護に任せられる。

続く、屋島、壇ノ浦の合戦では義経の下で軍奉行の任にあたる。軍奉行というのは、戦況報告のほか、誰が手柄を立てたとか、規律違反をしたかということも鎌倉に報告することになる。景時の慎重論に対し、義経は向う見ずな奇襲作戦、二人は事あるごとに対立した。

義経の抜群の戦術は功を奏し、圧倒的な勝利になるが、この時、景時は義経の越権行為や独断専行を嘆く報告書を頼朝に送っている。この報告書が「景時の讒言」と呼ばれるもので、これ以降、義経は坂道を転げ落ちるように、失脚していったのである。

義経失脚の原因は他にもあり、頼朝の内擧を得ずに朝廷から任官されることを始めとする、かなり軽率な一面があり、後白河法皇の権謀術策に操られ、頼朝の猜疑心を煽ったのではなにかと思われる。

景時の讒言とされる事件はほかにも多かったが、御家人を理由もなく陥れたのではなく、頼朝政権にとって、権威と権力を脅かす人物を肅清するために、頼朝にうまく利用されたのではないか。前述の上総広常しかり、血筋の上で頼朝と同等の、甲斐源氏安田義資においても、些細な理由で殺害している。甲斐源氏の雄とされる安田一族の没落はのぞむところで、景時はまさに頼朝にかわって、ひそかな望みをかなえてやったといつていい。

また、景時は侍所の所司として御家人たちの行動に目を光らせ、取り締まることを職務とする、忠実で融通の利かない人物であったようである。ほかの御家人たちとの摩擦も生じ、敵も多かったと思われる。

### 4 景時追放までの経緯

景時は独裁者、頼朝の側近として鎌倉体制の基盤固めをしてきたが、頼朝が正治元年(1199)正月死去することにより、その立場は急変する。

その年の10月、御家人66名による景時弾劾状が、二代将軍になった頼家に提出され、鎌倉を追放される事件が起こった。その経緯について『吾妻鏡』に詳しく書かれているので、その概略を述べる。

10月25日 結城朝光が御所の侍の詰め所において、亡き頼朝のために一万遍の念仏を捧げようと傍輩らに勧めた。その時「忠臣は二君に仕えずと聞くが、私は頼

朝が亡くなった時、どうして出家遁世しなかったか。それにしても今の世は薄氷を踏むようなものだ」と憂いた。

10月27日 阿波局が朝光に「景時の讒言によって、あなたは誅殺されようとしている。それは一昨日の『忠臣は二君に仕えず』と述べたことによる。景時はその発言を謀反の拠であると頼家に告げ口をした。今となっては虎口の難は逃れられないだろう」と囁いた。

そこで朝光は狼狽して三浦義村に相談した。すると義村は「ことは重大であり至急対策を講じよう。総じて、文治以降、景時の讒言によって命を落としたり、職を失った者は数え切れない。宿老らと相談しよう」と言って、和田義盛、安達盛長ら呼び寄せた。

二人は「早く同心して連名の訴状を作ろう」と、中原仲業に文書を作らせることにした。

10月28日 御家人らが鶴岡八幡宮の回廊に集まった。66名が署判を加えた。その訴状を和田義盛、三浦義村が持参し大江広元に渡した。

11月10日 広元は訴状を受け取っていたが、ためらっていた。それは頼朝の時代、ともに政治に関与し、親しかったので罪科にされるのは不憫であり、なんとか和解の方法はないかと、考えていたからである。しかし、和田義盛は激怒し早く出せと迫る。

11月12日 広元は訴状を頼家に提出する。頼家は景時を召され、是非を述べよと仰った。

11月13日 景時は弁明することが出来ず、子息や親類らを率いて一宮(寒川)に下向した。景茂(三男)だけは鎌倉に留まる。

11月18日 比企能員宅で行われた蹴鞠の会の酒宴で、景茂は頼家の御前で「父、景時は先君の寵愛を一身に受けておりましたが、今となってその頼みがない中で、どうして権威を振るうことが出来ましようか」と述べた。

12月9日 景時が一宮の所領から鎌倉に帰参した。

12月18日 景時の事は数日来、何度も審議があったが、ついに本日鎌倉を追放とされた。義盛、義村が奉行した。景時の屋敷は壊され永福寺の僧坊に寄進された。

正治2年(1200)

1月20日 景時は昨夜、子息たちを伴って一宮を出発した。これは謀叛を企て、上洛するとの風聞があり、時政、広元、三善善信らの審議の末、景時追討を決定される。義村らが追撃のために派遣される。亥の刻に景時父子は駿河の国、清見関に至ったところ、近隣の武士たちに発見され、合戦の後、ついに一族もろともあえない最後となる。

1月21日 伴類33人の首を路頭に懸けた。

以上が、『吾妻鏡』から抜粋した景時追放のいきさつである。

## 5 景時追放の背景

景時追放の表面上の理由は、景時の結城朝光に対する讒言とされているが、それにしても、なぜに66名にも及ぶ御家人の反撥をかったのだろうか。

それには、鎌倉政権が目指す方向性が、景時と他の関東武士たちの間に、相容れない対立があったからだと思われる。

頼朝が幕府樹立に成功出来たのは、多くは関東武士団のおかげであった。しかし、戦いが終わると、頼朝は京都から下ってきた下級貴族を迎え、側近官僚に採用し政治体制を整えた。彼らは仕事の性質上、頼朝との結びつきを強め、次第に大きな権力を持つようになる。関東武士にとっては、疎外されたようで面白くなかった。景時は武士でありながら、側近官僚に近い立場にあり、他の関東武士たちからは憎悪されていたと思われる。

また、頼朝の朝廷に対する妥協政策にも、関東武士たちは不満を持っていたと思われる。関東武士たちの望みは、朝廷の力に左右されない強力な武家政権の樹立であった。しかし、頼朝の独裁制の下では従うしかなく、不快感を感じていたと思われる。景時も頼朝の路線と同じく、朝廷との協調路線であり、他の関東武士とは対立していた。

『吾妻鏡』は、建久7年(1196)11月から、建久10年(1199)1月まで欠落している。その間、朝廷では親幕派の九条兼実が、源通親の策謀により失脚している。一方、頼朝は落馬がもとで死去した。

頼家が建久10年(1199)二代将軍になった直後、頼朝の妹婿の一条能保の遺臣であり、鎌倉の御家人であった後藤基清らが、源通親襲撃を計画する事件が起こる。この動きを事前に察知した通親はかねてより通じていた大江広元に急使を送り、幕府を味方につける。その結果、基清は頼家の雑色に捕えられて、後鳥羽院庁に引き渡された。それを機に親幕派の公卿らがつぎつぎ要職をはずされ、文覚上人も流罪になった。

これら一連の処置は頼家の諒解のもとに行われたが、頼家は鎌倉御家人や親幕派の公卿たちを守ることは出来なかった。

その後、基清は讃岐の守護職を没収され流罪となった。後任には近藤国平という、他の関東武士とは、異質の武士が守護に選ばれた。

朝廷に対し弱腰で、御家人の権利を保護しない頼家に、関東武士たちは反撥し不安をかきたてられる。そして、頼家が訴訟に直接判決を下すことが止められ、時政、景時など、重臣13名の合議制がとられた。

しかし、この合議制に頼家は反撥し「小笠原長経以下4名は、たとえ乱暴を働いても、敵対してはならない。また、彼ら5名の外は特別な命令がなければ、頼家の御前に参ることは許可しない」と命令を出した。景時、中原仲業がそれを奉行した。

関東の御家人たちにとって、頼家に頼朝のような独裁制を再現させることは、どうしても避けたかったと思われる。頼家に代わる将軍をと考えたかもしれない。それにはまず、頼家の乳母夫であり、強力な後見である景時がどうしても邪魔になるのであった。

## 6 北条時政の陰謀

これら御家人の動向をを察し、幕府の権力を握ろうと企んだのが時政であった。彼は伊豆の二流在庁官人であったが、娘、政子が頼朝の御台所となったことで権力を持つようになった。

しかし、頼家が将軍になると、彼は、愛妾、若狭局の父である比企能員や、その一族を寵愛し、時政の権勢は弱まっていった。頼家を廃して自分の思い通りになる、弟の千幡(実朝)を将軍にしようと企んだ。その手始めとして、能員より才覚が勝る、頼家の乳母夫であり、御家人の恨みの的となっていた景時に狙いをつけた。

そして、景時追放事件の仕掛け人は時政の娘で、政子の妹の阿波の局である。彼女は実朝の乳母であり、頼朝の弟、阿野全成の妻でもあった。

景時追放の『吾妻鏡』に関する記述は詳しいが、北条氏が事件に関わったという記述が無いのが、かえって疑わしい。

景時追放を、ことのほか強く煽ったのは、日頃から景時に不満や個人的恨みを持つ御家人たちであった。

**三浦義村** 三浦、和田など三浦党は、景時の属する鎌倉党とは領地が隣接していることから、長年にわたる確執があったと思われる。(大庭御厨濫行事件に始まり、御厨を引き継いだ三浦義村と景時領の寒川一宮は領地を接している)

**和田義盛** 侍所の別当で景時の上司にあたるが、実務面では景時には及ばなかったと思われる。建久3年(1192)義盛が服喪となった際に、景時は別当の職を借り受けながら、ついに返してくれなかったという恨みがあった。景時追放後すぐ別当に復帰する。

**比企能員** 養母は頼朝の乳母、比企尼であり、比企尼の二人の娘は頼家の乳母である。また、能員の娘の若狭の局は頼家の妾であり、二人の間には嫡子一幡をもうけていた。

能員は頼家の最大の後ろ盾であったが、時政の陰謀に気付かず、景時をライバル視して追い落とす側にまわったと思われる。

**畠山重忠** 重忠の代官が伊勢国の沼田御厨で横領事件を起こした。重忠はその責任を問われ、所領没収の上、身柄を拘禁されるという、重科に処せられてしまった。武勇を惜しまれ赦されたが、重忠はこれを不服として、武蔵国に引き籠ってしまう。景時は反逆を疑い、起請文を進上するようにせまる。重忠はこの時のことを、遺恨に思っていたのではないか。

## 7 景時追放後の北条氏の動向

景時追放に成功した時政は「遠江守」に任命され、従五位下に叙せられる。頼朝時代、御家人武士と源氏一族の間には、厳しい身分差があり、国司になれるのは源氏一族とされていた。

したがって、時政が国司に任命されたことは、彼が源氏一門に準ずる評価を与えられたことを意味する。幕府内での北条氏の立場は急上昇したのである。

その後、時政は建仁3年(1203)、頼家の強力な後見、比企能員を騙しうちにし、比企一族や嫡子、一幡までも殺害した。その後、頼家は將軍の地位を追われ実朝がこれに代わる。そして翌年、頼家は伊豆修善寺において殺害された。

かくして時政は幕府の中樞にすわり、御家人たちの所領安堵などの政務を行うようになる。

## 8 追放後の梶原一族

追放後の梶原一族に関する『吾妻鏡』の記述には次のようなものがある。

### 正治2年(1200)6月29日

景時の次男、景高の妻は、政子の御所の官女で、寵愛は比類ないものであった。頼朝の時に尾張国、野間、内海をはじめとする所々を領していた。しかし、夫が誅殺された後は、恐怖の思いで隠れていたが、審議のすえ所領は今まで通りとされ、本領を安堵される。

### 承元3年(1209)5月20日

北条氏による景時一族に対する供養が行われる。(以来、北条一族は時頼による建長寺、海晏寺などを通じて、梶原一族を供養した)

### 健保6年(1218)12月26日

次男景高の子(荻野二郎景員)が小山朝政、結城朝光兄弟の推挙で実朝の右大臣任官式の隋兵に選任される。隋兵は譜代の勇士、弓馬の名手、容儀神妙の三徳を兼備するものでなければならない。

朝光は景時追放事件の立役者であり景時追放後、兄の朝政は景時の守護だった播磨の守護となる。これも裏で時政が糸を引いていたのではないか。なぜに二人は景時の孫を名誉ある隋兵に推挙したのであろうか。ここまで時代が経過すると、ことの真相は現れるのではないか。景時を罪に陥れたのを謝罪しているかのようである。

『吾妻鏡』は時としては景時の傲岸な振る舞いなどを述べているが、総じては優れた官僚的人物であるとしている。

## おわりに

頼朝が死んで頼家の時代になると、今まで將軍の独裁支配を甘んじて受けてきた御家人たちは、朝廷におもねらない武士独自の政権を望むようになる。そんな時代趨勢の中で、景時は將軍頼家の強力な後ろ盾であり、親朝廷派であって、御家人たちにとっては最も障害となる人物であった。

そんな中、武家政権の指導者を目指す北条氏は景時肅清のため、結城朝光と阿波局を使って讒言事件を仕組む。御家人たちは景時憎しで団結する。

頼家は景時の弁明を期待したと思われるが、彼の才覚では庇うことが出来なかった。景時

の政治能力も頼家のもとでは機能せず、景時は幕府内での地位は諦め、京都に活路を求めたのではないか。

北条氏は紛争の圏外に立ち、傍観者を装っていたが、追放後、景時に謀反の疑いをかけて追討の命令を下した。そして自分が守護をつとめる駿河国清見関で在地の武士に討ち取らせた。

その後、北条氏は有力御家人の比企氏、畠山氏、和田氏を次々滅ぼし、幕府の実権を不動のものとする。

景時鎌倉追放の真相は北条氏による権力争奪の第一戦であったと思われる。

## 参考文献

- 「現代語訳 吾妻鏡」 五味文彦・本郷和人編 吉川弘文館  
「日本の歴史7 鎌倉幕府」 石井進 中央公論社  
「梶原景時 知られざる鎌倉本體の武士」 梶原等 新人物往来社  
「相模のものふたち」 永井路子 有隣新書  
「炎環」 永井路子 文春文庫  
「鎌倉幕府（その政権を担った人々）」安田元久 新人物往来社  
「鎌倉の豪族 II」 岡田清一 かまくら春秋社  
「相模武士(1)鎌倉党」 湯山学 戒光祥出版  
「頼朝の武士団」 細川重男 洋泉社  
「犬山羽黒今昔物語」 羽黒地区コミュニティ推進協議会編